

2026年度大学院入試問題（2026年2月15日実施）

解答または解答例

言語科学 研究科 言語学 専攻（博士前期・日本語教育学コース）

試験科目：（英語）

試験時間：（60分）

【解答例】

問1【解答例】

「はい、そうです」で答えられるのは、次の例1のように基本的には質問文が名詞述語文（「~のだ」も含む）の場合に限られる。提示されている会話例において、Aの質問は動詞述語文であるため、「はい、そうです」で答えるのは不自然である。

初級においては、質問文が名詞述語文の時には「はい、そうです」で答えられること、形容詞述語文や動詞述語文の質問文においては、次の例2や例3のように述語を繰り返して答えるよう指導／練習が必要である。

例1) 名詞述語文

A: この学校の学生ですか。

B: はい、そうです。

例2) 形容詞述語文

A: この問題は難しいですか。

B: はい、難しいです。

例3) 動詞述語文

A: 明日のパーティーに行きますか。

B: はい、行きます。

問2【解答例】

否定的フィードバックとは、いわゆる誤りの訂正のことで習得には不可欠なものだとされている。習得には肯定証拠（＝目標言語で何ができるかという情報）と否定証拠（＝目標言語で何ができないかという情報）が必要で、質、量が伴ったインプットを受けていれば肯定証拠は得られるが、母語話者が使っていないという否定証拠は学習者には曖昧で気づきにくいいため、誤用が生じた時に教師や熟達度の高いピアからフィードバックを受けることが重要になる。第二言語習得研究では、二言語に共通の文法項目（例：副詞の位置など）で、第一言語より第二言語の規則の適用領域が広がる場合は肯定証拠があれば習得可能だが、反対に適用範囲を狭める場合には、否定証拠がないと習得できないことも明らかになっている。

近年は規則に依拠せず、用例に多く遭遇することによって暗示的に言語を学ぶタスクベースの言語指導（TBLT）がSLAの研究者から提唱されている。そのような教授法であるからこそ、いっそう否定的フィードバックの役割は重要になると考えられる。意味のあるコンテキストの中でコミュニケーション主体の授業を行なっている場合には、学習者の誤りの部分のみ訂正して自然な反応のようにフィードバックするリキャストや、相手の発話の不明瞭な部分、誤っている部分をはっきり言うように促す明確化要求が有効である。これらは暗示的フィードバックであり、コミュニケーションの流れを阻害しないものである。否定的フィードバックには、明確な誤りの指摘や文法説明をする明示的フィードバックもあり、文法練習を行なっている時には効果的に機能すると考えられる。また、意味重視の活動でも、場合によっては手短かに明示的フィードバックをすることも考えられるであろう。

問3【解答例】

学習者にとっての読解活動は、日本語のインプットの好機であるとともに、テキストの内容を味わう喜びや達成感を得るといった情意面での効果も有する。こうした効果を十分に引き出すためには、学習者がテキストを適切に理解できるよう導くことが不可欠である。その際、トップダウン・ボトムアップの両モデルを意識した読解活動設計が重要な意義をもつ。

中級レベルでは、テキストの長文化や抽象化が進み、一文単位の理解の積み重ねだけでは十分な理解に至らない。そのため、テキストのトップダウン的な全体把握と、語句や文型のボトムアップ的な精密理解の両面を支援する活動設計を行う意義が大きい。

まず、トップダウン的な読みを促す活動の意義について述べる。学習者の中には、一文レベルの理解に注力してテキストの包括的な理解に至らなかったり、未知の語句の確認に過度に集中し、テキストの最後まで読解が到達しなかったりするケースがみられる。そこで、読解の導入としてスキーマを活性化させ、テキストの要点やストーリーの流れを大局的に捉えるよう導く工夫が有効である。また、全体の趣旨をつかむ、必要な情報を探しながら読む、未知の語句の意味を文脈の中で推測する、先を予測するといった、母語で自然に行っているような読みのストラテジーを、日本語に対しても使えるよう支援することも有効だと考えられる。

次に、ボトムアップ的な読みを支える活動も不可欠である。文を正確に理解するには、語句や文型に関する知識が欠かせない。また、文と文の関係を捉えるには、接続詞や指示詞などの理解も必要である。加えて、中級においては漢字や漢字語の幅広い知識も求められる。これらの積み重ねが、一文およびその集合体であるテキスト全体にわたる精密な理解を可能とする。よって、学習者の注意を語彙や文法、漢字に向け、適切な理解がなされているかを確認したり、正しい理解に導いたりする支援も、重要な意義をもつ。

以上のトップダウン・ボトムアップの両モデルは、通常、補完的な関係にあり、日常場面ではその相互作用により読む行為が成立している。しかし、教室活動においては、それぞれのモデルを個々に意識した読解活動の工夫をすることが、効果的な学習につながり得る。

トップダウン的な読みの活動としては、例えば… [※以下略。実際の解答においては、トップダウン的な読解活動例として、ストーリーの前半部分のみを提示して後半の展開を予測するピア活動や、要点理解に資する問いを先に与えてからの読解などをあげ、その工夫について自由に論じる。同様に、ボトムアップ的な読解活動例として、注目させたい語句や接続詞の空欄補充、特定の文型に即した正確な読みの成否を問う設問などをあげ、その工夫について自由に論じる。]